大阪自治労連第22回定期大会

結成20周年を節目に
新たな闘いの前進を

大阪自治労連は９月11日から12日の２日間、大阪市中央区のシティプラザ大阪で第22回定期大会を開催しました。大会は、自公政権が退陣し、新たな政権が生まれる歴史的な情勢のもと、多くの代議員の活発な討論を行い、結成20周年を節目に新たな前進をめざす運動方針を満場一致で決定し、取り組みの先頭に立つ新役員を選出しました。新委員長には前田仁美さん（府職労）を選出。自治労連の地方組織では全国初の女性委員長が誕生しました。

労働者派遣法抜本改正など国民要求実現へ全力あげる

当面する秋の闘いでは、①新しい国会で、労働者派遣法抜本改正や後期高齢者医療制度廃止など国民要求を実現する闘いの先頭に立つ、②マイナス人勧を許さず、生活改善をめざす賃金闘争をすすめる、③構造改革に対して、住民との共同を広げて闘う、④秋の組織強化・拡大月間を成功させる取り組みに全力をあげる決意を固めあいました。

新委員長に前田仁美さん（大阪府職労）

おおさか自治体の仲間

発行：大阪自治労連（大阪自治体労働組合総連合）　2009年９月15日　No.248

〒530－0041　大阪市北区天神橋１－13－15大阪グリーン会館４Ｆ　☎06－6354－7201　FAX06－6354－7206
E-mail:mado@osaka-jichiroren.jp
URL:http://www.osaka-jichiroren.jp

発行人／谷　真琴　　編集人／久保　貴裕
平成２年９月12日第３種郵便物認可
毎月15日発行（１部10円）組合員の購読料は組合費に含まれています。

写真左から前川さん、浅浦さん、阪上さん

四條畷市職労

阪上　友子さん
学校支援員（市立中学校）
市職労委員長

前川　照美さん
学校支援員（市立小学校）
市職労副委員長

浅浦　幸（みゆき）さん
養護助教諭（市立幼稚園）
市職労書記長

子どもたちの心に寄り添い、介助する仕事
「毎日が小さなことの積み重ねです」

「おしっこカード」で意思表示

「先生といっしょやったら、授業受けられるねん！」一般のクラスの子といっしょの授業になじめなかった子が、こんな声をかけてくれるようになりました。「信頼関係ができるまで1年かかりました。毎日毎日が小さなことの積み重ねです」と阪上さんは言います。特別支援学級の子どもたちが、一般のクラスの子どもたちともコミュニケーションがとれるように、学校の生徒全員に気を配っています。

できるまでじっと待ってあげること

「すぐに手を貸すんじゃなくて、自分からできるように、じっと待ってあげることも大切なんですよ」と前川さん。支援学級の子どもたちが、小さなことからでも自分で障害を乗り越えられるように、児童みんなで気を配るように努めています。車椅子で入学した子が、卒業する時には自分で歩行器具を使って歩けるようになったり、まっすぐに走れなかった子が、練習をして運動会では一人でトラックを走れるようになったり。給食の時に汚してばかりいた子も、口のまわりを拭く指導をして、2年間かけて、きれいに食べられるようになりました。毎日の小さな変化や成長も、子どもたちみんなで喜び合います。

毎朝、園の門前で声をかけて

浅浦さんは幼稚園の養護助教諭。4～5歳の子どもたちの健康管理や生活指導をしています。「自分の子どもを大切にしたいです」

配っています。

自閉症、身体障害、発達障害など、一人ひとりの実情に合った手助けも工夫します。おしっこが我慢できなくて漏らしてしまう子には、恥ずかしがらずに「おしっこ」と言えるように指導しますが、最初はどうしても声に出せない子がいます。そんな子には「おしっこ」の意思を表示をするカードを作って渡し、おしっこをしたくなったら相手に見せられるようにします。ひとつできれば、うんとほめてあげます。「自分の気持ちを、しっかりと相手に伝えることを大切にしたいです」

に障害があっても発見できなかったり、障害があることを認めたがらないお母さんもいます。保護者とのコミュニケーションは欠かせません」

毎朝、園の門前に立って、子どもたちや保護者一人ひとりに声をかけ、子どもたちの様子をうかがいます。保健室は、子どもたちが体と心を休める大切な居場所になっています。

この仕事が大好きだから

子どもたちや保護者との長期にわたる信頼関係が必要な仕事。しかし市当局は２００７年度から、学校支援員や養護助教諭の身分を３年間の「任期付短時間勤務職員」に切り替えました。雇用期限が過ぎても働き続けたければ、また採用試験を受けなければなりません。賃金は以前より５万円もダウンして月約13万円に。「給料は下がっても、仕事の中身は下げるわけにいきません。子どもたちのため安心して働き続けられる職場にするために、組合でもがんばります！みんな、この仕事が大好きですから」